



はじめに

さまざまな形で現れている現象（病態）をどう処理すればよいのか、その判断と方法を試行錯誤し、結果に一喜一憂しながら臨床を重ねていくうちに、気づいてみれば30年を優に超える年月が経過していた。そして現在、好むと好まざるとにかかわらず、自分の臨床経過を時間軸に沿って見ざるを得なくなった。時間の再評価は容赦なく診断や手技のあまさを思い知らせてくる。そして、崩壊の流れが見えてくると同時に、手をつけても大過ない症例、治療介入すれば大きなリスクを覚悟しなければならない症例が見えてきた。悪戦苦闘するのは、大半が過剰な力（Hyper functional force）である。

本書は、このような筆者のありのままの歯科臨床の記録であり、残念な結果に至った症例もたくさん提示している。しかし、このような患者さんからこそ、かけがえのない非常に多くの示唆をいただいた。

系統だった考察もなく、経験的に診断を下し対処していた暗中模索の歯科臨床に方向性を見出すことができたのは、20数年前、故筒井昌秀先生、筒井照子先生の臨床に触れて以来である。その卓越された手技と明晰な治療体系に感銘し、包括的な視点で臨床に取り組むことの重要性を知るに至った。以後、筆者なりに自分の臨床のなかで試行錯誤を繰り返し、われわれ^{いちまる}一〇会（山口歯科臨床研究座談会）のスタイルに見合った包括的歯科診療の体系ができあがってきた。

本書が、読者諸氏の臨床の一助になれば幸いである。

2017年10月

小川廣明